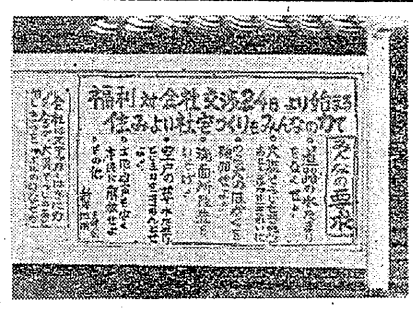
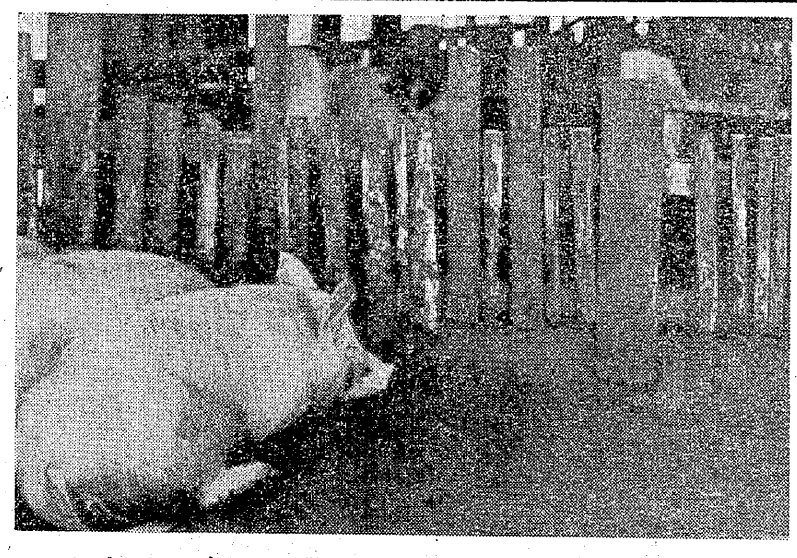
住みよい社宅づくりめざして
まず道路の舗装など
新港地域分会（三川）乗り出す





写真上は、臭気を発散し、蚊や蠅をまき散らす豚小屋。豚約200頭という。右はアピールの壁新聞。

今新港三川地域分会（分会長＝池畑富富さん）は、住まいの社宅の環境の悪さにたまりかね、もう少し住みよい社宅にしようと分会員に呼びかけるとともに、会社に対して改善要求を提出、主婦会といっしょに交渉を続けている。

同地域分会の行動は、ステッカーはりから始まった。

―道路の石ころ、水たまりを舗装せよ。

―野ら犬を捕獲せよ。

―養豚場を撤去させよ。

―暴走族を取り締まれ。

―外灯を増設せよ。

―大溝清掃の強化と跡始末を励行せよ。

などなどが全社宅にはられた。

会社ステッカーをはぎ取る

ところが、それを見た会社は三川鉱人事管理課の係員が、作業員数人をひきつれてきてはぎ取っていってしまった。はぎ取っていったステッカーのなかには、要求とまったく関係がないばかりか、地域分会の掲示板のただの掲示ポスターまでふくまれていた。

ただちに社宅事務所に向け、怒りの抗議行動へ。要求の実現をめざす交渉にも、かえって力がはいった。

同地域分会では、すぐまたビラをはった。そして今後も交渉を重ねてゆくというが、同社宅が住みよい環境に面目を一新するよう期待してやまない。

日記

三川指導部　蓮尾文子

ふと思いついて元日から日記をつける事になりました。子供は「ふん」と笑ったけれど、なんでもいい、一日のうちで心にとめたものをひとつでもいいから書くようにしました。

結婚してから、今年は二十五周年を迎えます。人生の、ひとつの区切りとしての思いつきもあったのです。実際に書いたものを読み返してみますと、つまらないものもあります。でもぜひ続けたい、努力したいと思います。

物価高、インフレ、不況が続く今年である事は否定できません。毎日やりくりに心を砕く中で、豊かな未来のくらしのために考え、苦しみ、行動を積み重ね、少しでも明るい展望が切り開かれるように一日一日を大切にしよう。その足跡をふり返ってみる時に、日記が反省のためのひとつのよすがともなれば、自分の思いつきもまんざらではない、と私は思うのです。

また、日記を書き続けることができた時はじめて、「ふん」と笑った子供に向かって私はきっと威張ってものがいえることでしょう。

☆　☆

三月（やよい）の暦

1日　全国緑化運動。
3日　ひな祭り。耳の日。
5日　日本で初めての展覧会が、東京の湯島聖堂で開催された（明治六―一八七八年）
6日　特定休日（三池炭鉱）
7日　消防記念日。
8日　国際婦人デー。
12日　奈良の東大寺二月堂のお水取り。
18日　彼岸入り。
21日　春分の日。
23日　世界気象デー。
24日　彼岸明け。
25日　電気記念日。
30日　奈良の薬師寺花会式。

歌集制作以後

三川指導部　町佳郎

抱きしむる詩歌集ひとつ区切りなし励みつつこの道歩まんと思う
わが歌集読みぬとかかり来夜の電話涙声なる姉の声はも
確かなる未来抱くか友はわが歌に広がりのなしと評しぬ
歌集出し初めの心たかぶりも退きて静かなる日々の戻り来
胸に湧く新たなる思い抑えつつ亡父を読みし歌読み返しおり
夕暮れて作業場出づれば肌を刺す雪もよいの風われに荒あらし
シベリヤ風邪猛く流行ればテレビ消し子らを諭して早目に寝する
翼あれば運びゆきたし降る雪を地も焼けしアラビヤのわが兄の許
配転の女子ら加わりてわが職場花開きたる如くにぎあう
四月になれば幼稚園に行くのよと娘は制服を着げてはしゃげり

×

福利・厚生の向上をめざす闘争にひき続き、三池労組は炭労との統一のなかで春闘の準備を強めてゆく。特に八～九の両日、東京で開かれる炭労大会は重要です。

炭労はこの大会で「政策提言」「石炭政策春闘方針」「財政」などの問題を討議し、それぞれの方針をきめます。

三月。人びとは冬の寒さのなかにちじこまってきたところから脱け出して、春の準備にはいりますが、連合通信によれば「気象庁の長期予報によりますと、三月に入るとしばしば寒のもどりがある」とのことです。本格的な春の訪れは下旬になりそうです。

随筆
梅が飛ぶ

退職者　田中正敏

梅の花便りをきく季節になった。桜が若人の花なら、梅は老人の為に咲く花のように思われる。梅は桜のような、はなやかさはないが、自己に厳しい古武士のような風格がある。

太宰府の「飛梅」も咲きそろった事だろう。主人の道真公を慕って、一夜にして京から飛んで来たという名木である。ところがこれを単なる伝説として一笑に付してしまうのが現代人の合理主義である。なるほど、梅が一夜にして何千キロも飛んで来るはずもない。

しかし、飛梅の伝説は、客観的事実ではないが、昔の日本人の主観的事実である。いや、思想といってもよい。昔の日本人は現代人と違い、道真公への梅の愛情を素直に信じ、それを語り伝える事により、この世における愛というものの証しをしたのだろう。

こんな意味で、飛梅伝説は、もう一度私達が考えねばならぬ大切なものを含んでいるようだ。

愛といえば、すぐにフリーセックスを思い、主人を裏うといえば古くさい封建的なもののようにいう現代人だが、私は飛梅伝説を生んだ古い日本の精神的な風土をなつかしく思う。人間だけが愛する事と祈る事を知っているのだ。

梅の花はその果実と共に、旧い日本の心を伝える残り少ない遺産ではなかろうか。

詩
友達

中三　平田庸一

一九七八・二・二〇

友達
友達といってもいろいろ
いると思う
喧嘩をしてできる友達
しらずしらずにできる友達
など
いろいろいると思う

しかし
真の友達と言うならば
一緒に考えたり
助け合ったりする事に
唯の
友達と違った
なにかがあると思った。

×

平田庸一さんのお父さんは、三川指導部の平田光男さんです。

採炭工の中村さん
荒尾マラソン大会に優勝

中村さん

さきごろ行なわれた〝荒尾市民年代別マラソン大会〟の五十歳代の競走に見ごと優勝、なかまを驚かした一人の三池労組員がいる。

その人は三川指導部に所属する払採炭工の中村義雄さん。荒尾市緑ケ丘社宅小鳩町五十一棟。昭和二年二月二十二日生まれだから、たしかに満年齢五十歳である。

大会は二月十九日の日曜日に催された。幼稚園児から五十歳代にかけ、小、中、高校生そのほかで十一段階に区分、荒尾市が毎年行なってきているもので、今年は六回目にあたる。

コースは、五十歳代の分で荒尾市民運動公園の陸上競技グラウンドをスタート、その周辺をまわって再びグラウンドに帰る四キロロードだったという。参加者十数人にのぼったにもかかわらず、中村さんが優勝したもの。

中村さんは、もともと小、中学時代から走ることが好きで、かつては朝日駅伝や九州一周駅伝にも参加したほどの健脚のもち主。ところが数年前坑底で右脚を重傷。右脚膝下から神経を切断した。そのため、一時は医師もサジを投げたものを、もち前のがんばりで「そんならいっそう……」と、動かぬ脚で走りつづけた結果、今ではほぼ完全に右脚の自由をとりもどしての勝利だった。

「走ることこそ命を大切にする道であることを知った。これからも走り続けて、いつまでも若さを保っていくつもり」と中村さん。

細い体のどこにその根性ありやと頭をかしげずにはいられないが、今後のがんばりを心から祈っておこう。

おねがい

職場・地域の各分会は、分会員にまつわるいろんなエピソードを本紙編集部へご連絡くださるようお願いします。　編集部

幸運におお喜びの藤田さん

▼…こんど、四山指導部の藤田嘉広さん（試錐工）は思いがけない幸運を恵まれ、香港・マカオへ豪勢な旅行に。

一月二十八日のこと、停年のため職場を去る仲間の送別会が、山鹿温泉の富士ホテルで催おされた。ひと晩どまりの催しに、同じ分会（職場五分会）の藤田さんももちろん参加。この送別旅行は勤労者旅行協会があっせんしたもので、一枚の〝香港・マカオ旅行（三泊四日）券〟がついていた。参加者たちは、その旅行券の取得をクジできめることにした。クジをひいたところその幸運の券をひき当てたのが藤田さんだったのである。

かくいうしだいで、藤田さんは近く三泊四日の香港・マカオ旅行へ。「二カ月おくれの、とんだお年玉だ」、とよろこんでいるそうな。